# 記号の「一義性」の分析としての「記号の論理学」

深尾 紘平（北海道大学大学院）

**発表要旨：**

本発表は、初期フッサールが『記号の論理学（記号論）』（以下『記号論』と略記）において「記号の論理学（Logik der Zeichen）」という際のその意味を明らかにすることを試みる。フッサールがこの著作において示さんとすることは、タイトルの通り、「記号の論理学」の可能性である。『記号論』の最後において記号の「論理的（logisch）」な使用が提示されていることから、フッサールのこの最終的な主張自体は明白である。しかしここで考えられている記号の「論理的」な使用は、例えばある記号に論理学的な意味が付与されており、それが論理学において論理学的な意味のもとで用いられていることとは必ずしも一致しない。ここでの「論理的」は、フッサールが「論理的」と対にして扱う「前論理的（vorlogisch）」と区別されながら捉えられる必要がある。したがって、この「論理的」と「前論理的」との区別が何であるかを明らかにすることが、最終的に「記号の論理学」の解明につながる。本発表ではこの区別を明らかにするために、フッサールが『記号論』において用いる「一義性（Eindeutigkeit）」という用語に着目する。『記号論』において「一義性」がどのような意味であるか、またそれがいかにして「論理的」と「前論理的」との区別と関係するかを扱うことで、「記号の論理学」が何であるかの解明を試みる。

よって本発表は以下のかたちで進む。まず「論理的」と「前論理的」との区別を概説する。次に、「一義性」が『記号論』においていかなる意味で用いられているかを確認する。「一義性」の意味を確認したのち、再度「論理的」と「前論理的」との区別に戻ってくることで、「一義性」がどのようなかたちでこの区別と関わるかを示す。最終的に、「一義性」の分析を行うことが「記号の論理学」の一つのかたちであることを示したい。

宮田による『記号論』についての一連の研究（1989; 1990; 1991; 1992; 1993）においても示されている通り、本発表で扱う「一義性」は、フッサールの同時期の著作である『算術の哲学』においても重要な位置を占める。そのため、「一義性」がどのようなかたちで「論理的」と「前論理的」との区別と結びつき、いかにして「記号の論理学」の一つのかたちであるかを示すことは、『算術の哲学』の『記号論』を介した解釈の一手引きとなりうる。

文献：

Husserl, Edmund, „Zur Logik der Zeichen (Semiotik)“, in: *Husserliana*, Bd. XII: *Philosophie der Arithmetik. Mit ergänzenden Texten (1890–1901)*, hrsg. von L. Eley, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1970, SS. 340-373.
宮田幸一「フッサールの『記号の論理学』研究(1)」『創価大学人文論集』1、1989、A19-A41。
宮田幸一「フッサールの『記号の論理学』研究(2)」『創価大学人文論集』2、1990、A34-A72。
宮田幸一「フッサールの『記号の論理学』研究(3)」『創価大学人文論集』3、1991、A22-A39。
宮田幸一「フッサールの『記号の論理学』研究(4)――第 2 草稿の注釈的研究――」『創価大学人文論集』4、1992、A58-A78。
宮田幸一「フッサールの『記号の論理学』研究(5)」『創価大学人文論集』5、1993、A52-A109。